

『新古今集』成立直後の後鳥羽院と西行

——伊勢を通して——

芳岡勝輝

はじめに

一 『最勝四天王院障子和歌』の院詠

『新古今集』は後鳥羽院が編纂下命して成立した勅撰和歌集である。その勅撰集で最多の九十四首入集を果たしたのが西行であり、ここに編者ないし同時代において西行への高い評価があることがわかる。それは院の西行の評価と連動していよう。そもそも院の長期に及ぶ和歌活動のなかで、西行の影響は多々見られる。

例えば『新古今集』成立以前には、院も西行の自撰歌合『御裳濯河歌合』・『宮河歌合』と同じく、内宮と外宮それぞれに和歌を奉納しており（「内宮御百首」・「外宮御百首」、隠岐配流後も『時代不同歌合』や隠岐本『新古今集』のなかで、西行詠に接していた。一方で『新古今集』が成立した直後あたりの、院が西行詠から受けた影響については明らかにされていない。ここでは、承元元年（一二〇七）の『最勝四天王院障子和歌』（以下『障子和歌』）と、元久元年（一二〇四）から承元二年までに、春日社や内宮・外宮をはじめとした諸社に奉納された八社三十首奉納歌の院詠を取り上げて、院はどのように西行詠を摂取したのかを考えてみたい。

最勝四天王院は三条白河に立てられた後鳥羽院の御願寺である。天台座主寛慶（?～一一二三）が草創して以降、慈円が院に寄進し承元元年に供養をみる。院は最勝四天王院御堂内部を飾るために名所障子絵を設け、さらにその障子絵に和歌を添えることを企図した。この企画には院のほかに、慈円ら新古今時代を代表する歌人十名が参加し、名所四十六箇所詠まれた計四六〇首の和歌をまとめて『障子和歌』と呼ぶ。

『障子和歌』のうち、院が詠んだ伊勢国名所詠には西行からの影響が指摘できる。院の「二見浦」「鈴鹿山」「大湍浦」を詠んだ三首を取り上げ考察する。

二見渇月をもみがけ伊勢の海の清きなぎさの春のなごりに

（後鳥羽院・三二一）

（西行詠からの摂取と考えられるものに傍線を付した。以下、対応する箇所ごとに線種を分けた。）

院詠は二見浦の浪に月をみがくように命令する歌で、単純な自然詠のように思われる。しかし、伊勢神宮の神域である「二見浦」

を詠んでいる以上、「波に磨かれて輝きを増す月という風景は、神の顕現といった宗教的な意味合い」をもつており、「月を磨け」と願うことは、神の加護を願うことに繋がる^②。という。この時代、神祇歌で詠まれた月は神の顕現を意味し、神と仏とを結びつける機能をも有していたこと、さらに西行も月を「聖なる自然物」として和歌に詠み込んでいたことが論じられている^③。

二見浦は西行が庵を結んだ地として有名で、伊勢信仰との関わりも合わせて新古今時代以降は伊勢国の歌枕として認識されるようになった^④。故に『障子和歌』で二見浦を詠む際に、新古今歌人が西行へ意識を向けるのも自然であろう。西行が詠んだ二見浦詠は六首あり、うち二首は、

月やどる波のかひには夜ぞなきあけて二見を見る心地して

〔聞書集〕・九二

おもひきやふた見のうらの月をみて明暮袖に浪かけんとは

〔西行法師歌集〕・六〇七

と月を詠んだ歌であった^⑤。

『障子和歌』の二見浦詠では「月」を詠み込むように指定されていたと考えられ、院も含めて全ての歌人が月を詠み込んでいる。月は二見浦を代表する景物という認識が共有されていたのである。そもそも、「二見浦」詠における月の歌は、「玉くしげ二見の浦の月影は明がたにこそすみわたりけれ」〔久安百首〕・秋・一三五）や、「暁望浦月」の詞書を伴う、「月影の二見の浦にかたぶけば鏡をあらふおきつ白浪」〔出観集〕・秋・四二二）のように、西行以前にも六例ある。そのため西行としては、従来の伝統に則り、この二首を詠んだだけなのかもしれない。しかし、先述した

ように西行の影響により二見浦は新古今時代に歌枕として成立したのであり、それ故に新古今歌人のあいだに、西行の二見浦詠の高い関心があつたと考えられる。新古今時代に月を詠み込む歌が増えてくることを合わせると、この二首の影響から、『障子和歌』では月を「景物」に設定したのではないだろうか。ここから院の西行詠への意識もうかがえる。

次に「鈴鹿山」題の歌を取り上げる。

すずか川深き木のはに日数へて山田の原に時雨をぞきく

〔後鳥羽院〕・三〇一

「鈴鹿山」題において、院のみ「すずか川」を詠んでいる。院詠にみえる「山田の原」は、西行の「聞かずともここをせにせん郭公山田の原の杉の群立ち」〔残集〕・六）から取つたものと思われ、「聞かずとも」歌は『新古今集』に入集している。院の歌も切り継ぎ時代に『新古今集』に切り入れられた。しかし、『新古今集』内に「山田の原」を詠んだ歌はわずか三首しかなく、和歌で詠むのは珍しかった。『障子和歌』でもその傾向は同様で、院以外の歌人は「山田の原」を詠んでいない。

後鳥羽院の歌は難解歌として多くの解釈がある。というのも山田の原は鈴鹿川の流域にはなく、このふたつは大きく隔たっているからだ。新日本古典文学大系では鈴鹿川に散り積もる紅葉をみて、山田の原にふる時雨の音が幻聴のように聞こえると解する^⑥。その場合、「日数へて」は「深き木のは」の美景に愛着して思わず旅の日数を費やしてしまったことを指し、それ故に今ごろは訪れていたはずであった「山田の原の時雨」が想起されたとする^⑦。一方で新編日本古典文学全集では鈴鹿川の紅葉を見て山田の原に

ふる時雨の音も実際に聞いたと解する。¹⁰⁾

西行の「聞かずとも」歌は「山田の原」を詠んだものであり、鈴鹿山は詠み込まれていない。むろん西行も、

鈴鹿山憂き世をよそに振り捨ていかに成行我身なるらん

〔山家集〕・雑・七二八

ふりずなほ鈴鹿に馴るる山立は聞え高きもとどころかな

〔聞書集〕・一九七

と鈴鹿山を歌に詠んでいる。しかし、前者は鈴鹿山を「よそに」して、自分の身の成り行きを思う歌、後者は鈴鹿山に住むという悪名高い「山立」、つまり山賊を捕らえる立場から詠んだ歌であり、鈴鹿山そのものの景色を詠んだ歌ではない。そのため名所詠を詠む『障子和歌』において参照しがたいとは思われる。それならば、新たな土地を加える理由もなく、西行詠から撰取をしないうという態度も当然認められるはずであった。しかし、「山田の原」をわざわざ取り込むことで、院詠は歌意も複雑になり難解歌として今に伝わることになった。院が撰取した西行詠は鈴鹿山を詠んだ歌ではないことに注意したい。

加えて注目したいのは、このような撰取が伊勢のもう一つの歌枕である「大淀浦」詠でも見られることだ。

大淀の浦風かすむ明けほの雲井を雁のおとづれてゆく

〔後鳥羽院〕・三三二

後鳥羽院の歌は、あけほのの大淀浦に雁が来たことを歌う。

「雁のおとづれてゆく」という表現は、西行の「人は来で風のけしきも更けぬるにあはれに雁のおとづれてゆく」(『新古今集』・恋三・一二〇〇)からのものだと推定できる。¹¹⁾この歌は『御裳漉

河歌合』初出で、後に『新古今集』恋部に入集する。男の訪問がなくてだ風の音、雁の悲しげな声ばかりが漂うようすからは哀感が漂う。

大淀浦を詠んだ西行の歌はないので、『障子和歌』で「大淀浦」を詠むにあたり、院は『新古今集』に入集した西行詠の表現を用いて歌を詠んだことになる。

ここに挙げた名所はすべて伊勢国の名所である。つまり『障子和歌』の伊勢を詠んだ院詠すべてに西行詠からの影響が認められることになる。

二 伊勢奉納歌

次に八社三十首奉納歌の院詠を取り上げる。

八社三十首奉納歌は、元久・承元年間に春日社をはじめとした八社に院が各三十首奉納した歌群の総称である。八社のなかには伊勢の内宮と外宮も含まれており、それぞれ「内宮三十首」・「外宮三十首」と呼ばれる。『後鳥羽院御集』(以下「御集」)によると、承元二年(一二〇八)二月に奉納された。ここでは八社のうち伊勢に奉納した「内宮三十首」・「外宮三十首」を考察対象とする。

両奉納歌のうち、「内宮三十首」に西行詠を参照したものは二首見られる。¹²⁾

A 時鳥夜半の旅寝の明ほのに山飛ぶ声の雲に落ちくる

〔御集〕・一三五六

a 時鳥深き峰より出でにけり外山の裾に声の落ち来る

〔新古今集〕・夏・西行・二二八
b 横雲の風に別るるしのめに山飛び越ゆる初雁の声

〔新古今集〕・秋下・西行・五〇一
(便宜上歌にアルファベットを付した。)

後鳥羽院のA「時鳥」歌の歌意は、夜旅先で寝て明け方に目が覚めると、ほととぎすが山を飛び越えて鳴く声が聞こえる。である。「声」が「落ちくる」と表現するのは珍しく、これは西行のa「時鳥」歌から表現を摂取したものとされる。a歌も、ほととぎすが峰から出て人里近い山里でその声が聞こえることを「声の落ちくる」と表現する。a歌からA歌への影響が指摘できる。

また、A「時鳥」歌の「山飛ぶ声の」の部分はb「横雲の」歌からの影響がある。b歌は前句で雲が風で分れる景を歌い、下句では山を飛び越える初雁の声を聞く。A歌では「山飛び越ゆる初雁の声」から「山飛ぶ声」とし、詠み込まれる景物も「雁」ではなく「時鳥」になっている。

つまり、A「時鳥」歌は西行の異なる歌二首の影響を受けて詠まれていた可能性がある。そのような特徴をもつ歌が「内宮三十首」に収められていることに注意しておきたい。

Cながめばや神路の山に雲消て夕べの空を出でん月かげ
〔御集〕・一三七三

c 神路山月さやかなる誓ひありて天の下をば照らすなりけり

〔新古今集〕・神祇・西行・一八七八

西行のc「神路山」歌は、神路山から出る月がきれいに輝いているのは、神とお誓いによって天下を照らしているからだろうの意で、「神路山」は「天皇の治世を護る天照大神の神意の

象徴¹⁴」として歌われている。これ以降「神路山」は新古今歌人たちにも詠まれ、ついには、『八雲御抄』巻五「山」に「かみち(西行)」とあるように、神路山は西行詠によって歌枕として成立した。院もその享受のなかで歌を詠んだことになる。¹⁵

院はc歌から「神路山」と「月」を取り入れ、C「ながめばや」歌を詠んだ。この歌は、雲が消えて澄んだ月の光を見たいという単純な自然詠のように思われるが、古くからC歌に込められた寓意を巡って論が重ねられてきた。

この歌について早くに注釈を施したのは宗祇である。

心は、時代すゑにくだりて、人のころよこしまにまよひふかくなる、神冥王道の光をかくすことを嘆きおぼして、此世間のまよひの雲きえて、月日の光を待出でん空をながめばや、との御心にや。ある注に、おなじくは神とひとしくして、天下をたすげばやと也。雲は神慮をへだつる御ころばせの御歌なり。神代のすゑにくだるを夕にたとへ侍り。朝をば神代のはじめにたとへたり。
〔目讃歌註〕

宗祇は月の光に神の威光を読み、C歌を皇統の守護を打ち立てた歌と解する。江戸時代に入ると、後に起こる承久の乱の悲劇を連想して、「初句は、見まほしくおぼしめす也、二の句より下は、そのかみ東の北条が、よこさまなるしわざに障へられ給ひて、天の下の政、おぼしめす御心にもえまかせ給はぬことを、雲のさはりにたとへて、うれたくおぼしめす御心を、大神宮にうたへ祈り給ふなるべし」(『美濃の家づと』)と、この歌から院の対幕府の思いを認めるようになる。『尾張の家づと』でも「此天皇の御歌に北条をにくませ給ふ事、時々みゆることに大神宮にたてまつら

せ給ふ御歌なれば、其の御心はへならんも知りがたし。其の義ならば、二三の句は大神宮の神徳にて北条滅び失せてといふこと、下の句は天下静謐して御心清き御代とならんといふ事也。されど詞のうへいとほのか也。なを伊勢國に御幸ありて神路山の月をみそなはし給ばやとよませ給へるにやあらん。姑二義也」と、宣長の解釈を支持する。しかし、この時期の院は実朝と良好な関係を築いており、実朝を越えて北条氏を排除する意思があつたとは考えにくい。¹⁸⁾久保田淳はこの時期の院詠に沈痛な歌が少なくないこと、また、「内宮御三十首」と「外宮御三十首」がそれぞれ、

神路山あふぐ心のふかきをもいはず思へば色に見ゆらん

〔御集〕・二三七八

神風やとよみてぐらになびく四手かけて仰ぐといふもかしこし

〔御集〕・二四〇八

と「神慮を期待する歌」で閉じられており、八社三十首奉納歌のなかの一つ「住吉御歌合」での、「奥山のをどろが下も踏み分けて道ある世ぞと人に知らせん」(『御集』・一六九八)の存在を考慮すると、C「ながめばや」歌にも宗祇がいうような寓意は存する¹⁹⁾という。従うべき見解である。

となると、c「神路山」歌からC「ながめばや」歌へは、「天皇の治世を護る天照大神の神意の象徴」として「神路山」を位置づける方法が踏まえられ、皇統を守護するという思いが共通して詠まれる。むろん院と西行の身分や立場の差からは守護の方法は全く異なるものであろうが、その理念は通じるところがあつたのではないだろうか。

なお外宮への奉納和歌のなかに西行詠を踏まえたとおぼしき歌

は見られない。ただし、神宮奉納歌に西行詠を踏まえている点、また西行詠の表現と発想から、自らの皇統を打ち立てる意思を表わした歌を詠んだ点は注意され、以上のことから伊勢奉納歌を詠む際に、院のなかに西行への意識が存したと考えられる。ここでも『障子和歌』と同様に、伊勢を詠む際に西行詠を踏まえる院の態度を見ることができるといえる。²⁰⁾

しかし、このような態度はこのころに特有のものであつたらしい。というのも、院が隠岐の地から伊勢への奉納を企図した歌には、西行詠を踏まえたあとが見られないからである。

院が隠岐の地で詠んだ伊勢奉納歌は『夫木和歌抄』(以下『夫木抄』)に取られている。²¹⁾『夫木抄』は冷泉為相の依頼により、遠江国勝間田の藤原長清が編纂したとされる私撰集で、その成立は作者の官位表記および詞書から延慶二年(一三〇九)ごろとされる。『夫木抄』には現存しない散佚資料を多く含んでおり、その中には後鳥羽院の和歌もある。ここでは『夫木抄』内の伊勢神宮に奉納したとおぼしき歌を取り上げ、院は西行詠を参照しているのかを考えたい。

『夫木抄』には「太神宮百首御歌」の詞書をもつ院詠が七首取められる。吉野朋美はこの七首の分析を通して、このなかに「隠岐にいる後鳥羽院の(実情実感)が投影」されているとし、さらに『御裳濯和歌集』を編んだ寂延を通して伊勢神宮に実際に奉納されたと述べる。²²⁾氏は和歌の分析にあたり参考歌も掲げているが、そこには西行詠の影響は見られない。ここではこの七首が隠岐での作とした上で、院はどのような歌を参考にしてているのかを氏の研究によりながら確認する。

まずは自然詠五首を挙げる。

D 難波がたかすみのおきを、行く舟のおす手もたゆき朝なきの空

(春一・四九一)

E 物おもひに春とも知らぬながめにはさくらがえだも猶しぐれ
つつ

(春四・二二四八)

F 帰るかりおぼろ月夜のなごりとや声さへかすむ明ぼののぞら

(春五・二五八九)

G 須磨の海人の身を吹きとほす浦風にもしほの袖やいとど寒け

き (雑十七・一六六五七)

H 思ふかたの伊勢をの海人の釣り竿の長き夜あかずぬる袖が
な

(同・一六六五八)

D 「難波がた」歌は、霞む「難波がた」で「おす手もたゆき」

海人の様子を思いやる歌である。参考歌としては、『堀河百首』

「海路」題を詠んだ源師時の「手もたゆく浦づたひしてこぐ舟は

沖のなごろをおつるなるべし」(一四四九)と、『障子和歌』で院

自身が詠んだ「難波江やあしの葉しろく明くる夜の霞の沖にかり

もなくなり」(五一)の二つが挙げられている。

E 「物おもひに」歌は詠歌主体が物思いにふけっている間に、

春がきたことに気づいていないことを詠んだ歌で、これは「物お

もふに過る月日はしらねども春やくれぬる岸の山吹」(遠島御百

首・春・二〇)に通じた時間意識をもつ。表現としては「桜こ

そ雪とちりけれしぐれつつ春とも知らで過しつるかな」(元輔集・

八)と重なることが多い。

F 「帰るかり」歌はおぼろ月夜のせいで帰雁の声までも霞んで

くへなき雲路にきゆる雁がねの声さへ霞む春のあけほの」(二二
二)からそのまま撰取している。

G 「須磨の海人の」歌とH 「思ふかたの」歌は海人を詠んだも

ので、『夫木抄』内では隣接している。前者は「身を吹きとほす」

ほどの「浦風」が海人の袖に吹くので、海人は寒さに身を震える

だろうと海人の身を思いやった歌、後者は「思ふかた」のことを

一晚中想い続けていたことで、涙でぐっしり濡れた袖を詠む。

表現面では両者とも『新古今集』入集歌を参考にしており、G 歌

は「寝覚めする身を吹き通す風の音を昔は袖のよそに聞きけん」

(哀傷・和泉式部・七八三)の第二句「身をふきとほす風の」を

自らの歌にも用い、さらに「袖」も詠み込む。H 歌は「涙のみ浮

き出づる海人の釣竿の長き夜すがら恋ひつつぞ寝る」(恋五・光

孝天皇・一三五六)を踏まえて、夜の長さを表すために、海人の

釣り竿のように長い夜」と「海人の釣り竿」を例として用いる。

これら五首の参照歌は吉野が指摘したとおりであり、西行詠が参

考にされた跡は見られない。

I 神風やあめの八重雲吹きかけよまがへる道にあとや見ゆると

(雑一・七八〇四)

J 神路山いかに時雨のふればかは頼みし杉の色かはるらん

(雑一・八二七二)

I、J 歌は先の五首とは異なり神祇詠である。I 「神風や」歌
は「まがへる道」の自分の「あと」を見るために、雲を吹き払う

ように願う。この歌について吉野は、『日本書紀』天孫瓊杵尊

の降臨の場面での、「皇孫乃ち天磐座を離ち、且天八重雲を排分

け、稜威の道別に道別きて、日向の襲の高千穂峰に天降ります」

(巻第二神代下)の表現を念頭に置いたとするが、直接的には『新古今集』の「ひさかたの天の八重雲ふり分けて降りし君をわれぞ迎へし」(神祇・紀淑望・一八六六)を見ていたのではないだろうか。I歌に西行からの影響は見られない。

J「神路山」歌は、どれほど雨が降れば、頼みとする神路山の杉の色も変わるのだろうか、いやもはやそのようなことは起こらないだろうの意で、頼りにしていた伊勢の加護を失ったことを暗示する。表現について、杉の色が変わると発想する歌は非常に少なく、『障子和歌』「初瀬山」で通光の詠んだ「たづねみん雪こそ今ははつせ山契りし杉は色かはるとも」(四三)の下句を踏まえたものか。

J歌の「神路山」は、先述したように西行詠によって歌枕と考えられるようになった場であった。そのために、西行が詠んだ「神路山」詠も確認しておく。

西行詠のなかに「神路山」が詠み込まれたものは五首ある。

①深く入りて神路のをくを尋ぬればまたうゑもなき峰の松風

(『千載集』・神祇・二二七八)

②神路山月さやかなる誓ひありて天の下をば照らすなりけり

(『新古今集』・神祇・一八七八)

③神路山松の梢にかかる藤の花のさかりを思ひこそやれ

(『拾遺愚草』・二七三二六)

④神路山御注連にこもる花盛り子良いかばかり嬉しがるらん

(『夫木抄』春四・一一四一)

⑤神路山岩ねのつつじ咲きにけりこらがま袖の色にふりつつ

(同・春六・二二四一)

①の歌意を新日本古典文学大系は、深く入って神路山の奥を尋ねてみると、この上ない峰、霊鷲山に吹く松風がここにも吹いているよ、とする。一見単純な自然詠のように見えるが、この歌は「高野の山を住みうかれてのち、伊勢の国二見浦の山寺に侍けるに、大神宮の御山をば神路山と申、大日如来の御垂迹を思てよみ侍ける」の詞書をもち、「真言の本尊大日如来の垂迹である天照大神への讃仰を述べる」ことを真意とする神祇歌と解釈するのがふさわしい。②はc歌として先述した。神祇歌としては①と②の二首が存する。

③は定家から送られた『宮河歌合』の判に対する西行からの返歌である。④「藤の花」は定家を暗示しており、西行は「藤の花のさかりを思ひこそやれ」、すなわち定家のますますの繁栄を願っている。ここでは伊勢神宮への奉納を目的とした『宮河歌合』に関連して、「神路山」を持ちだしたのであり、ことさらに神祇詠には結びつかない。④は花の盛りを喜ぶ「子良」の姿、⑤もつつじが咲き誇るようすを歌うものであり、いずれも『夫木抄』の分類どおり春歌である。③から⑤は自然詠である。

これら五首のなかに院のJ「神路山」歌のように、「時雨」や「杉」は詠まれておらず、西行詠からの影響は指摘できない。やはり、IとJ歌に西行詠からの影響は認められない。

ここまでの考察より、院は掲出した歌を参考にして詠作したと(吉野の指摘する通りである)、その中には西行詠は含まれないことを確認した。つまり、「太神宮百首御歌」の詞書をもつ歌に西行詠を参照した形跡はない。

ただし「夫木抄」には、これとは別に「大神宮百首御歌」とい

う詞書をもつ歌が五首ある。「大神宮」と「大神宮」の表記が異なるのだが、そこに大きな差異はない。本五首について吉野は言及していないが、それらも合わせると、伊勢神宮に奉納したこと²⁶を伝える歌は『夫木抄』のなかに十二首あることになる。残りの五首、すなわち「大神宮百首御歌」という詞書をもつ歌を考察していく。

K 夏ふかみ庭も葉びろの玉がしはしぐれとならず夜はのむら雨

(夏三・三七五〇)

L 花をのみながめなれにしみよしののふるさととほき秋はぎの花
花 (秋二・四一八六)

M ふしみ山あくる田のものにたつ鳴のしもにふしつるあとやみゆらん
(秋五・五七〇七)

N 冬の夜の月にわかるるむら雲に時雨くまなき有明のそら

(冬一・六三七九)

O 冬されば野田の玉川こほりゐてはぎす物は夜半のしら雪

(雑六・一一〇九一)

K 「夏ふかみ」歌は、葉を広げて柏に雨が降りそそぐようすを歌う。この歌は「玉がしは庭も葉びろになりにけりこや木綿四手て神まつころ」(『金葉集』・夏・源経信・九七)を参照したと思われ、院詠は「庭も葉びろの玉がしは」とする。L 「花をのみ」歌は、花ばかり眺めてなれ親しんだ吉野山のふるさととは、すっかり遠のいて秋はぎの花が咲いている。と「秋はぎの花」を詠んだ歌である。詠歌年次は不明なもの、家隆の「雪はまだ春ともわかず故郷にかすめば速きみよしのの山」(『玉吟集』・二〇六九)と重なる部分がある。M 「ふしみ山」歌は鳴を主題にした歌であ

る。ただし鳴そのものはおらず、ただ田に付していたとおぼしき跡から、鳴の存在を連想するばかりである。表現面では「あくる田のもの」は「伏見山松のかけより見たせばあくる田のもの」(秋風ぞ吹く)、『新古今集』・秋・俊成・二九一)を、「たつ鳴の」は「あはでのみ伏見の里にたつ鳴のはかずに落つるわが涙かな」(『夫木抄』・秋五・俊成・五七〇六)をそれぞれ念頭に置いていると思われる。N 「冬の夜の」歌は有明の空に煌々と輝く月を詠む。西行に月を詠んだ歌は多いが、参照したと思われる歌は見えない。

O 「冬されば」歌で注目されるのは「野田の玉川」という陸奥にある名所である。ここを詠んだ例は数少なく、「ゆふされば潮風越して陸奥の野田の玉河千鳥なくなり」(『新古今集』・冬・因・六四三)、「陸奥の野田の玉河みわたせば潮風越してこほる月かげ」(『続古今集』・順徳院・六一七)があるばかりである。O 歌と能因詠とは、「野田の玉川」を詠む点はもちろんのこと、冬の景を取り上げることが共通し、また初句の「冬されば」は「ゆふされば」に、景物の「はぎ」は「千鳥」に対応している。順徳院の歌は建保四年(一二二六)「内裏百番歌合」の一首であり定家と番え負となった一首である。ただし判詞に「みちのくの野田のたま川、まことに金玉声之由右方申定、尚右可勝之由左方に有沙汰、仍為勝」とあるとおり、「陸奥の野田の玉河」は評価されており、表現が受け入れられなかったというわけではない。院は順徳院の歌に和す意味も込めて、「冬されば」歌を詠んだのかもしれない。

以上の考察より、「大神宮百首御歌」の詞書をもつ歌にも、西

行詠の影響を受けたものはない。先に考察した「太神宮百首御歌」の詞書をもつ七首と合わせて、伊勢神宮への奉納を企図して隱岐で詠まれた歌には、西行詠の影響は認められないと結論づける。

三 西行への意識

ここまで論じてきたことから、同じ伊勢への奉納を目的としたものでも、都での和歌活動かそれとも隱岐でのそれかによって、西行詠撰取の有無に違いがあることが分かった。ではそれはいつたいなぜなのだろうか。

一院の、都における和歌活動と隱岐でのその最も大きな違いは立場であろう。すなわち都では万民を統べる治天の君であり、かたや隱岐では敗軍の将としてわずかな者をつれて寂しく余生を過ごすのである。この立場の相違が、院の伊勢奉納歌における西行詠撰取の有無を左右しているのではないだろうか。

院と西行は個人として内宮と外宮に和歌を奉納した数少ない歌人であり、そのためか院や西行が伊勢を歌に詠むことの意味が問われてきた。例えば西行の場合は平田英夫の、西行が伊勢を歌に詠むことで「和歌が歴史・治世・国家を表現する枠組みとして機能する可能性」を示したとする言が参考になる。院側からは吉野が、後鳥羽院の和歌奉納は「国家鎮護や皇室守護といった理念を背景に」もち、「治天の君という立場から」神が「自身の祈りを納受してくれると期待」したとする説明がある。つまり西行にせよ後鳥羽院にせよ、伊勢を詠む際には、必ずといつていいほど治世や国家を考えることに繋がるのである。むしろ両者のあいだに

は絶対的な身分差があり、単純に同一視することはできない。しかし一介の僧侶か治天の君かとの違いはあるとしても、それぞれの立場から「伊勢を想うことは、国家や歴史、そして天皇の治世を思うことにもつながる」のであった。故に院の場合、「内宮三十首」や「外宮三十首」を詠んだ際にも、「治天の君という立場から」「国家や歴史、そして天皇の治世を思う」という心中が存していたと思われる。

ではこのような心中が伊勢奉納歌を詠むにあたり、なぜ西行詠撰取と関わるのだろうか。ここで思い出されるのは、内宮・外宮三十首と『新古今集』との関わりである。すなわち、本奉納歌は「切り継ぎを完了させ、『新古今集』を完成させたいという強い意志のもとに奉納されたもの」であり、その意味で院にとつて、本奉納歌は『新古今集』と連続した営みであった。さらに、「社会を祈りおさめ、鎮魂をめざした勅撰和歌集」である『新古今集』のなかで、西行が入集第一位を果たした理由について吉野は、西行の歌が「過去への、死者への意識をこの集の中で明確化し、祈りおさめる役割を果たしたためであったとする。ならば『新古今集』の竟宴後、わずかに三年の月日が経過したにすぎない承元二年時点においても、院は西行に社会を（鎮魂）する姿を見ていたであろう。となると院が西行詠を踏まえることは、立場は違えども、社会を祈りおさめる西行に連なり、自らも和歌を詠むことで社会を治めようとしていたことを示すのではないだろうか。

院の「内宮三十首」は、西行詠二首から撰取をした歌と、『新古今集』で神祇部に収められた西行詠を参照した歌が含まれている。これも、皇統守護という自らの心中に基づいたものであり、

特に後者は「まさに実地で、乱世のただ中に生き、それを見、歌に詠むことで社会の鎮魂をめざした宗教者」である西行の神祇詠を踏まえることが、治世や社会を祈り、治めようとする院の思いに繋がると思われる。

しかし、隠岐に配流された後はかつての治天の君という地位が剥奪され、見るも無慙な敗軍の将に墮した。もはや院には、社会や国家を思う気持ちもさらにはその資格もなく、伊勢神宮の奉納歌にはただ個人的な祈りを込めるしかなかった。それ故、社会を〈鎮魂〉する役割を有していた西行詠を用いることなど、院には考えられなかったのではないだろうか。改めて「内宮三十首」と「外宮三十首」の院詠には、社会への祈りを詠むにあたり、〈鎮魂〉の役割をもつ西行に連なろうとする、院の意思が読み取れるであらう。

おわりに

『新古今集』成立直後の営みにおいて、西行詠から影響を受けている院詠を論じた。それは『障子和歌』の伊勢国名所すべてと、「内宮三十首」のなかに見られた。『新古今集』内で形成された社会を祈りおさめるという西行の姿はそのまま継承され、後鳥羽院は西行に連なり自らは治天の君という立場から社会、国を治めようとしていたと考えた。

後鳥羽院は『後鳥羽院御口伝』のなかで西行を、「生得の歌人」「不可説の上手なり」と絶賛している。隠岐本『新古今集』でも慈円に次ぐ第二位の入集数であり、その高い評価は終生変わらな

かった。このような高い西行評を形成せしめた契機の一つに、『新古今集』の成立を挙げなければならない。『新古今集』で確立された西行の姿が、その後の院詠にも見られることを考えると、『新古今集』における西行評価は、院の西行評にも直結している。西行が『新古今集』で第一位の入集数を果たしたという事実は、歌人西行の評価という観点だけではなく、後鳥羽院の和歌活動における西行の影響という観点からも大きな意味をもつのである。

※引用本文は以下のとおりである。記載のないものは『新編国歌大観』に拠る。

『最勝四天王院障子和歌』：最勝四天王院障子和歌全注釈／『後鳥羽院御集』『山家集』『聞書集』『西行法師歌集』：和歌文学大系／『日本書紀』『新古今和歌集』：新編日本古典文学全集／『金葉和歌集』『千載和歌集』：新日本古典文学大系／『美濃の家づと』：本居宣長全集／『自讃歌註』『尾張の家づと』：自讃歌古注十種集成

【注】

(1) 『新古今集』は、後鳥羽院が隠岐に配流された後も含め約三十年に及ぶ改訂の長さをもつ。しかし、文学史上は元久二年(一一〇五)の竟宴をもつて一応の完成を見たとしてされている。ここでも竟宴時を、『新古今集』成立と見なした。

(2) 渡邊裕美子『最勝四天王院障子和歌全釈』(笠間書院、二〇〇七年)

(3) 平田英夫「神域の月の風景——神祇歌の生成——」(『和歌

的想像力と表現の射程 西行の作家活動』新典社、二〇一三年、初出二〇〇二年)

(4) 『歌ことば歌枕大辞典』(久保田淳・馬場あき子編、角川書店、一九九九年)「二見浦」項(山村孝一執筆)

(5) 「おもひきや」歌は、伝承歌や西行詠か疑わしいものも含める、石川県立図書館蔵李花亭文庫本『西行法師歌集』に見える歌であり、久保田淳蔵甘露寺伊長筆『西行集』には見えない。

なお『明月記』建永元年(一二〇六)六月十九日条によると、

自院有_レ召(新古今料云云、清範奉)、即馳参、与_二大府卿_一被_レ召云云、彼人不_レ参、大雷電之後、清範出来、下_二新古今_一、五卷有_レ之、依_レ有_レ故殿御押紙、可_レ見_二此事_一者

として、源通具が撰んだ恋部のなかには、

西行歌二首、一定西行歟(云云)、此事有_二不審_一者、可_レ止歟由申_レ之、

と西行詠として不審な歌があったことが記されている。西行が没してからまだ二十年も経過していない段階においてですら、西行が詠んだのか否か分からないものがあった。そのために「おもひきや」歌も西行が実際に詠んだのかは分からないが、新古今歌人たちが西行詠として享受した可能性はある。

(6) 注(4)に同じ

(7) のこる一首は越前の「神風や山田の原の榊葉に心のしめをかけぬ日ぞなき」(神祇・一八八四)であり、建仁元年(一一二〇)に院が主催した『老若五十首歌合』で詠まれた。

(8) 新日本古典文学大系『新古今和歌集』(田中裕・赤瀬信吾校注、岩波書店、一九九二年)五二六番歌脚注

(9) 田中裕「隠岐本削除歌考(二)」(『後鳥羽院と定家研究』和泉書院、一九九五年、初出一九八二年)

(10) 新編日本古典文学全集『新古今和歌集』(峯村文人校注、小学館、一九九五年)五二六番歌注

(11) 注(2)に参考歌として挙げられている。

なお、管見の限り、「雁のおとづれてゆく」の措辞を含む歌はこの二首しか見えず、「雁のおとづれてゆく」という表現は珍しいものであったことが分かる。

(12) 和歌文学大系『後鳥羽院御集』(寺島恒世校注、明治書院、一九九七年)で参考として指摘されているものを参照した。

(13) 「声の落ちくる」という措辞は新古今歌人たちに盛んに摂取され、院のA歌もそのなかの一つに位置づけられる(稲田利徳「西行と新古今歌人」『西行の和歌の世界』、笠間書院、二〇〇四年、初出一九九〇年)。

(14) 久保田淳「神路山」という歌枕(『旅の歌、歌の旅——歌枕おぼえ書——』おうふう、二〇〇八年、初出一九九〇年)

(15) 享受の様相は、注(14)掲出書に詳しい。

(16) 注(4)掲出書「神路山」項(島原泰雄執筆)

(17) 「内宮三十首」のなかに「神路山」を詠んだ院詠は二首ある(一三七三・一三七八)。「外宮三十首」には見えない。

(18) 平田英夫「後鳥羽院と和歌・いくさ」(日下力他編『いくさと物語の中世』汲古書院、二〇一五年)

(19) 久保田淳『新古今和歌集全注釈』第六卷(角川学芸出版、二〇一二年)一八七五番歌鑑賞

(20) たしかに伊勢社も内宮と外宮と別に分けると、外宮への奉

納歌には西行詠を参照したものが見えないのは不審である。しかし、田中喜美春が説くように、内宮と外宮の奉納歌は院の同一意図のもと詠出されたものであることから、ここでは一括りに伊勢社とまとめた(田中喜美春「後鳥羽院の香具山」『国語と国文学』第五十四巻二号、一九七七年二月)。

(21) 樋口芳麻呂「後鳥羽院」(『日本歌人講座第4』弘文堂、一九六一年)

(22) ここから、『夫木抄』が隠岐配流後の後鳥羽院の詠草を撰集資料として用いたと推測される。その経緯について、田淵句美子「隠岐の後鳥羽院」(『中世初期歌人の研究』笠間書院、二〇〇一年、初出一九九八年)は、『夫木抄』の成立に冷泉為相が関与していることを鑑み、「後鳥羽院の詠草や作品が、直接であれ間接であれ、隠岐から都へ、そして冷泉家にもたらされた可能性」を指摘する。

(23) 吉野朋美「神仏への信仰」(『後鳥羽院とその時代』笠間書院、二〇一五年)。

(24) 新日本古典文学大系『千載和歌集』(片野達郎・松野陽一校注、岩波書店、一九九三年)当該歌脚注

(25) 『拾遺愚草』では当該歌のあとに、定家から西行に送られたとされる歌をのせる。

神路山松の梢にかかる藤の花のさかりを思ひこそやれ

(西行・二七三六)

又返し

神路山君が心の色をみんなばの藤に花しひらけ

(定家・二七三七)

一方「夫木抄」では二七三六番歌を定家詠、二七三七番歌を西行詠と表記しており、この贈答歌は『夫木抄』の詞書に従い理解されてきた。しかし久保田は、もし二七三七番歌が西行詠とした場合、西行は定家を「下ばの藤」と卑下することになるとし、『拾遺愚草』の表記にならうべきだとする。『藤原定家全歌集』(久保田淳校注、ちくま学芸文庫、二〇一七年)(二五九五番)歌注参照。なお、本書の歌番号は新編国歌大観のそれと多少異なる。

(26) 樋口注(21) 掲出書は、『夫木抄』内にある大神宮に奉納した歌は九首とする。ただし歌そのものは掲げていない。

(27) 俊成は文治六年(一一九〇)に、伊勢社へ和歌を奉納している。ただし、内宮・外宮の別はなく百首単位で納められた。その百首は日吉や賀茂などの他社への奉納歌と合わせて「五社百首」としてまとめられた。

(28) 平田英夫「伊勢」を通して考える西行の作歌活動」(『西行学』第六号、二〇一五年八月)

(29) 吉野朋美「伊勢神宮と和歌——『新古今和歌集』神祇部神宮関連歌群とその周辺——」(注(23) 掲出書)

(30) 注(28) 掲出平田論文

(31) 田中喜美春注(20) 掲出論文は、「内宮三十首」の「今日までは心のうちに嘆く世をいかで知る夜の月ぞあやしき」(『御集』・一三三四)に注目して、本奉納歌に「天皇親政奪還の祈願」が含まれていたとする。しかし、承久の乱の十年以上前の営みで院のなかに「天皇親政奪還」の願いがあったのかは疑わしい。C「ながめばや」歌で述べたように、皇統を守るとい

レベルに留めておくのが妥当か。

(32) 注(20) 掲出田中論文

(33) 吉野朋美 「『新古今集和歌集』と鎮魂——西行・慈円をめぐる——」(注(23) 掲出書)

(34) むろん、『新古今集』の撰歌には定家を初めとした撰者たちも関与しているので、『新古今集』内の西行の姿が、そのまま院に反映することには慎重であるべきである。しかし松村雄二が述べるように、『新古今集』を「最後に統括したのはやはり後鳥羽院その人」であること、加えて隠岐本でも西行の歌数が上位に位置することを考えると、『新古今集』内の西行の役割と院の私意のあいだに大きな乖離はないと考える(松村雄二「西行と定家——時代的共同性の問題——」『論集西行』笠間書院、一九九〇年)。

(35) 注(33) 掲出吉野論文

(よしおか・しようき)

千葉大学大学院人文公共学府博士前期課程二〇二五年修了)